

Meridian

展示会通信第57号

神戸学院大学有瀬図書館
2021年4月22日発行

第56回有瀬図書館ギャラリー展

日本の 包

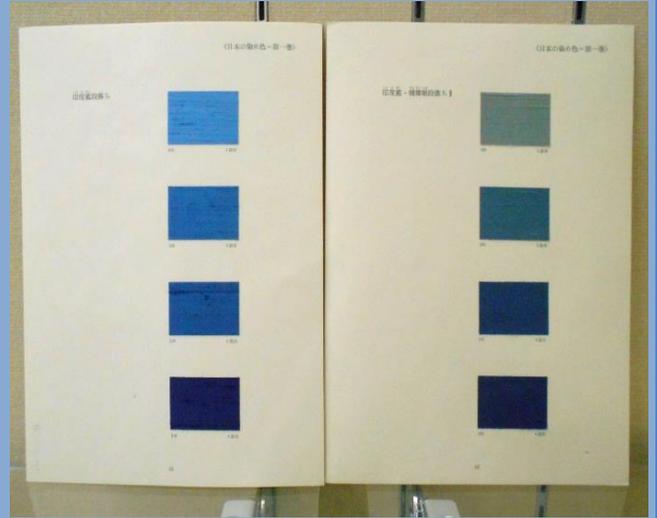
開催期間:2021年4月5日(月)~2021年6月30日(水)

開催場所:神戸学院大学有瀬図書館
本館2階 エントランス展示コーナー

*開催時間や開催期間は変更になることがあります。図書館HP・掲示にて、ご確認のうえご来館ください。

青

日本では、白・黒・赤とともに青はもっとも古い色といわれています。10世紀後半まで、青は単純に「青色」を示すものではなく、現在の紫や緑などが含まれていたと考えられています。現在も「あおい葉っぱ」などの表現が残っており、青という色が極めて抽象的で曖昧だったということが分かります。



「金の小判」は山吹色などともいわれ、古くから黄色く輝くものが金と考えられていました。

日本では「黄金の国ジパング」と『東方見聞録』に記されたほど、金の産出量が多かったといわれ、戦国時代には金の確保のため多くの争いが起こりました。豊臣秀吉も黄金の茶室、金閣寺などを愛し、権力の象徴として金を示しました。

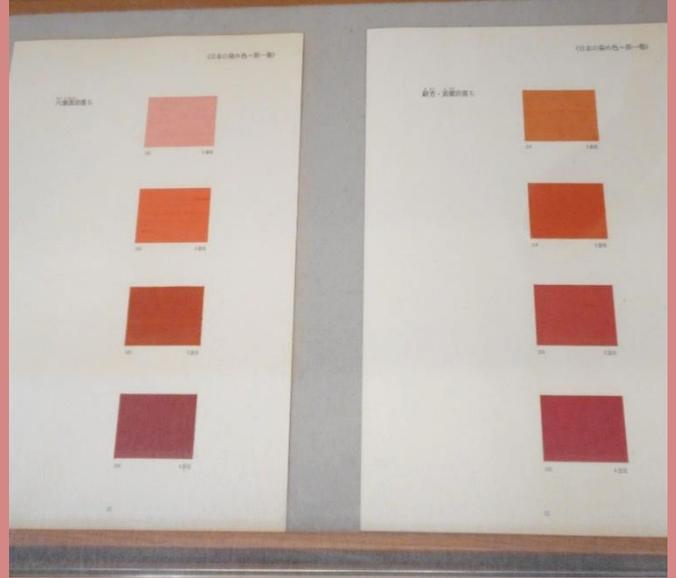
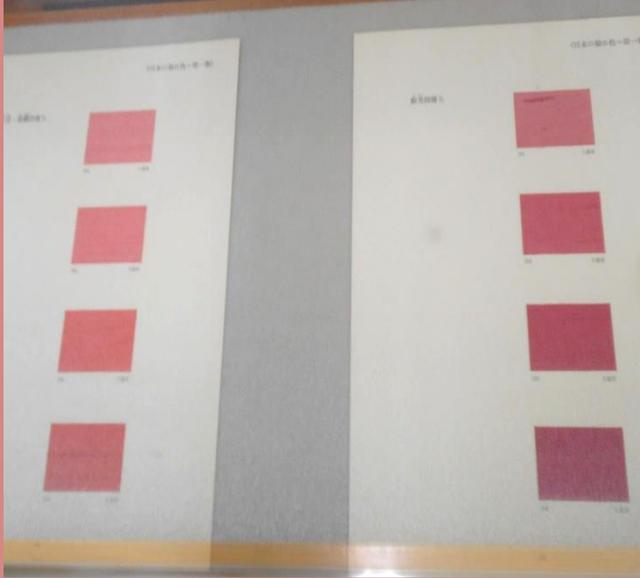
黄



赤

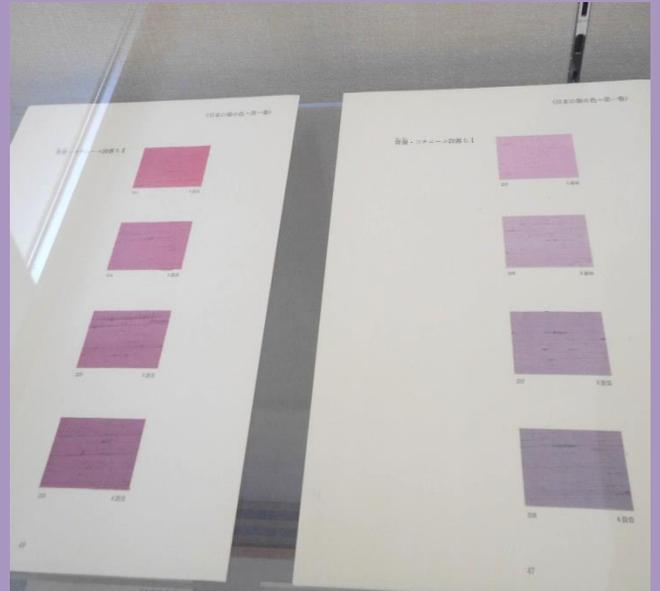
赤は、人類が火を使うことを覚えたときから意識され生まれたといわれています。

紅は、染料である紅花の産出が困難で高価だったため、平安貴族たちに非常な憧れをもたれました。色が褪めやすいことから、人々の心がうつろいやすいことにかけて、『万葉集』でもよく詠われました。

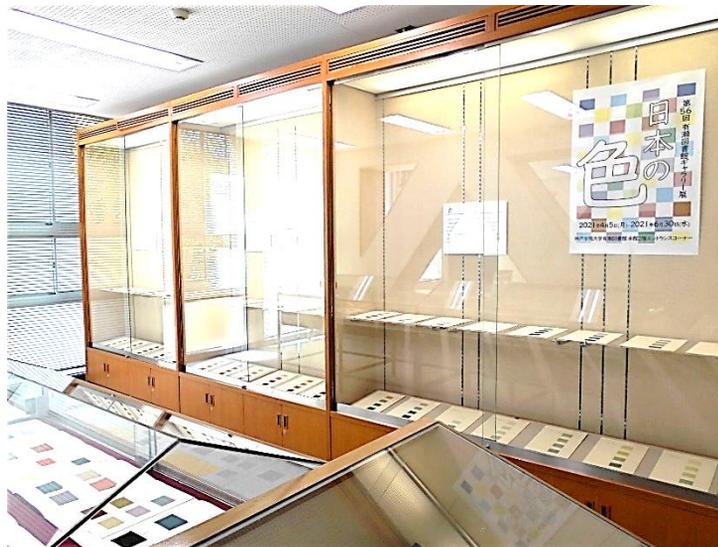


古代国家では、聖徳太子が官吏の位を十二に分けて紫を最高位の色としていたように、高貴な色として別格に扱われていました。その後平安時代に入ってから、『枕草子』や『源氏物語』の中で紫を高貴な人物の名称としたり、誉め称えたりしていることから、当時の紫への異常な傾斜がみてとれます。

紫



展示の様子



編集後記

今回のギャラリー展では、日本に古くからある「色」を展示しました。

日本人は、四季の移り変わりを、身近なものの色彩の変化から感じとってきました。その色の名前は2000以上あるといわれていますが、同じ色調に異なる名前がつけられたり、年代によって色調が異なったりと、非常に曖昧なものであることがわかります。

他の国にはない、日本人が持つ繊細で優れた色彩感覚が織りなす色をお楽しみください。

参考文献

浦野理一監修『日本の色と紋様 解説日本の色』毎日新社,1992

福田邦夫著『すぐわかる日本の伝統色』東京美術,2011

長崎巖監修『日本の伝統色：配色とかさねの事典』ナツメ社,2008



神戸学院大学図書館 展示会通信 MERIDIAN 第57号

2021年4月22日発行

発行・編集：神戸学院大学 有瀬図書館

〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518

TEL: 078(974)4584

E-mail: pub-lib@j.kobegakuin.ac.jp

HPURL: <http://opac.kobegakuin.ac.jp/>